

灯火法語

大切な人と

今日

話そう



(友人が残してくれた言葉)

●大阪の実家の父、若林眞人が5月21日に往生の素懷を遂げました。(享年七十六歳) 私にとってみれば、親として、僧侶として最後まで、有難い後ろ姿を見せてくれたように思います。親との別れは悲しく、寂しいことですが、そんな苦しみ、悩みを抱えて生きる私たちにこそ、仏さまはぬくもりある命の世界を告げてくださいます。

●父との別れは、思っていたよりも突然に訪れることになりました。最後に元気な姿を見たのは今年の二月末、久しぶりに子ども達を連れて里帰りをしたときでした。そこにはいつもと変わらない、父の元気な姿がありました。ご飯を家族みんなで囲み、孫の成長を喜ぶ父の姿がありました。

父の身体に大きな変化が現れたのは、亡くなる一ヶ月程前の四月末のこと。久しぶりに、兄からの電話が鳴りました。

「どうやら、父は癌の病気の疑いがある。今は痛みもだいぶあるようで、近々精密検査に行くことになった。もしかしたら、それほど長く生きれないかもしれないから覚悟しておいて」といった内容でした。医者でもない兄の言うことだし、まだ癌の精密検査も終えていない。気が早いんじゃないか？ 世間には癌を患っても治りゆく人もいる、たとえ余命を告げられたとしても一年くらいは大丈夫だろう。漠然と、まだ先まで生きていると考えていました。

今振り返ると、すぐにでも一本の電話でもいれて、不安を感じていたであろう父と話しをすれば良かったと思います。「明日電話をしよう」「次の検査結果が出たら電話をしよう」と、父と話をすることをずっと先延ばしにしていました。

月日は流れ、5月19日の晩、父の亡くなる二日前、照明寺では音楽の集い「おとよい」が開催されていました。その片付けがひと段落して、楽しかった時間の余韻が流れるなか、兄からの電話が鳴ります。現実突き返される、厳しい知らせでした。

「お父さんの体調が急変して、今、救急車で病院に向かってる、かなり状態が悪くて、今晚が山場かもしれない。明日の朝一番で帰ってきて欲しい」

癌の疑いがあると聞いてからは、覚悟をしているつもりでしたが、まさか、こんなに急に、その日が訪れるとは。

次の日の朝、子どもたちを学校に送りだし、その足で一人、空港に向かいました。搬送された病院に到着したのは昼ごろになりました。この時には父の状態も安定していたようで、緊急の病棟から、一般の病棟に移ったと連絡があったので、少し安心して心持ちで面会をすることができました。

久しぶりに会った父の姿は、口には酸素マスクが付けられており、呼吸をするのも大変そうな状態でした。でも意識ははっきりとしており、私が目の前にいることを喜んでいました。

昨晩は寝ずの付き添いをしていた、兄と母が先に家に帰ることとなり、そこからは父と二人のゆったりとした時間が流れました。寝ていることが多かったけれど、ときおり起き上がっては話をしたり、喉が乾くのか、何度も水を飲ませてあげました。息苦しそうな状態は続いていましたが、酸素マスクのお陰で呼吸も安定しています。

一般病棟の面会は19時までと決められています。そろそろ、父を残して病院を出なければならぬ時間が迫ってきます。病室を後にする前、汗をかいて、ぐっすりと眠っていた父を起こして、最後に言葉をかけることにしました。

久しぶりに、父の手を握り、「面会の時間が限られてて、そろそろ家に帰らないと行けないみたい。お父さん、ありがとう、いろいろと、世話になったな。今はしんどいやろうけど、どっちに転んでも大丈夫やからな、このまま生きさせてもらうても、このまま命終えて、お浄土に生まれさせてもらうても、どっちに転んでも大丈夫やからな。」

その言葉に父は、「ほんまや、南無阿弥陀仏、またお浄土で会わせてもらおうな、ありがとうな」と手を強く握り返してくれました。

「お父さん、また必ずお浄土で会わせてもらおう、でも、また明日もう一回、会いたいな、明日また病院に来るからそれまで元気であってよ」と告げて、病室を後にしました。結局それが、父との最後の会話となりました。

●この世は、「諸行無常」(形つくられたものは、常に移ろい変わる)と仏さまはおっしゃいます。言葉を変えると、「生老病死」は死ぬという、定めの中を生きています。しかも今日、命終わっても不思議ではない、「今」を生きているということです。

今まで幾度となく耳にした「諸行無常」という言葉。頭では理解しているつもりでも、いざ「私」や「家族」のこととなると、「まだ先がある」、「また会うことができる」と、だいぶ先の未来まで思い描いて暮らしているのが、私たちではないでしょうか。

「大切な人と 今日 話そう」

●親子や夫婦、兄弟、親友など、近い関係であればあるほど、大事なことを言葉にすることなく、「明日話そう」「今度、会ったときに話そう」と、いつも先延ばしにして生きてはおりませんか？ しかし残酷にも別れが突然に訪れることもあるのです。

人によって、大切な人に伝えておきたい話の内容は異なるのかもしれませんが。例えば、「ありがとう」といった感謝の思いであったり、「ごめんなさい」と、懺悔の言葉であったり。たった一言でも、近い関係だからこそ、恥ずかしく思ったりして、なかなかその言葉が申せないままに、日々が過ぎてゆくものです。だからこそ、皆さんにも申し上げておきたい。

「大切な人と 今日 話そう」

●有難いことに、私は短い時間ではありましたが、臨終が迫る父と同じ場所を過ごし、あたたかな言葉をかけることができました。しかし別れの形は人それぞれ。突然のお別れで、一言も言葉を交わすこともできなかった、そんな悔やまれる過去があったとしても、ご安心ください。

阿弥陀如来は我々の生涯をご覧になり、別離の悲しみに涙する私たちを救わんがために願いを起こされます。本願といえます。

「また一つのとこで出会う「浄土」に生まれると思つて、南無阿弥陀仏とお念仏を申して生きてゆきなさい」

どんな悔やまれる別れがあつたとしても、阿弥陀如来の本願をより所として、浄土に生まれて仏となる、と命をいただく念仏者には、懐かしき方とまた会うことのできる、あたたかな命の風景を思い描かせてくださいます。

さて、お浄土でまた父に会わせてもらつたときには、何の話をしようか？

南無阿弥陀仏